

“ Fable-land ” とKindergarten

*The Newcomes*にみる教育の寓話

市 橋 孝 道

1 . はじめに

William Makepeace Thackerayの*The Newcomes*は、第一章の冒頭から「古い寓話の寄せ集め」(a farrago of old fables) (1:3) ¹ による寓話のパロディーで始まり、続く序論における語り手の言葉からは、この作品そのものが何らかの教訓を含んだ“ fable ”であると仄めかされている。“ But who ever heard of giving the Moral before the Fable? Children are only led to accept the one after their delectation of the other: let us take care lest our readers skip both. ” (1:5) また最終章では、この書き出しに呼応するかのように“ fable-land ”という言葉が数回用いられている。“ As I write the last line with rather a sad heart,...Ethel and Clive fade away into fable-land.... Ah happy harmless fable-land.... Friendly Reader! May you and the Author meet there on some future day! He hopes so. ” (2:365-67) このように、物語の寓話的性質が作品の最初と最後に示唆されているにもかかわらず、*The Newcomes*がもつ教訓性はこれまでほとんど検討されてこなかった。² というのも、この小説は、その大部分が虚栄に満ちた英国の中産階級社会についての話であり、冒頭における寓話のパロディーはそれらを予告する風刺画だと考えられてきたからである。³ このため、最終章で繰り返される“ fable-land ”という言葉も、そのような英国社会への皮肉であると捉えられてきた。Juliet McMasterによる次のコメントはその好例と言えよう。“ That phrase ‘in fable-land’ becomes more ironically loaded with each repetition. For the whole action of the novel has been saying that the world of the Newcomes is *not* fable-land, any more than it is fairyland. ” (“Theme and Form” 185) McMasterの言う「ニューカム家の人々の世界」(the world of the Newcomes)は、彼女のそれまでの議論を考慮すると、銀行家Barnes Newcomeを中心とした欲得ずくの人間模様が露呈される英国の中産階級社会を意味していることが分かる。

しかし、この小説の舞台は英国のみに置かれているわけではない。 *The Newcomes*の登場人物たちはイタリアやフランスなどヨーロッパ大陸の諸国にも出向いていくのである。中でも、これまでほとんど注目されてこなかったドイツあるいはドイツ語を話す地域を舞台とする場面は、執筆時におけるThackerayの伝記的事実を考慮すると、注意深い検討を要する箇所だと考えられる。

*The Newcomes*を書き始めた頃、Thackerayは二人の娘とドイツを旅行していた。⁴ その後一時帰国した彼は、再び娘たちと共にイタリアへ旅をする。このイタリア滞在中、彼は*The Newcomes*の執筆を続けながらも幼い読者のために生涯初となる寓話的物語*The Rose and the Ring*を新たに書き始める。⁵ そして、1854年4月、イタリアからの帰国時にパリで娘たちと別れた彼は、ロンドンに到着してから娘たちの教育について次のような言葉を手紙に綴っている。⁶

I must take the German lady, that's the end of it. Did I write you about the German lady? In the governess hunt t'other day I lighted upon a school called a German college for ladies, so nice, neat, pretty, well ordained, with such a nice mistress over it that had I known of it 2 years since my girls should have gone there.... (LPP 3:369)

この手紙からは、彼が*The Newcomes*執筆以前からドイツ人による教育に関心を持ち、イタリア旅行からの帰国時も娘たちを教育してくれるドイツ人の女性家庭教師(governess)を探し求めていたことが分かる。イタリア滞在中には、*The Newcomes*執筆中にもかかわらず、新たに寓話的作品の創作にも着手しているため、Thackerayは親としてあるいは作家として、子供たちの教育に関心を抱いていたとも言えるであろう。これらを考慮すると、*The Newcomes*のドイツの場面には、子供たちの教育に関するThackerayなりの教育観が投影されていると考えられる。

本論では、まず、作品内におけるドイツ旅行の場面とその後のメイン・プロットに注目し、その場面の重要性を確認する。そして次に、作品刊行当時の歴史的事実を参照し、最終章で繰り返される“ fable-land ”の意味を

探って、*The Newcomes*のもつ教訓性を明らかにしたい。

2 . ドイツ人亡命者、Mr. Kuhn

Siegbelt Praver が “ The London society depicted in *The Newcomes* shows itself hospitable to German as well as French refugees. ” (Praver 366)と指摘するように、*The Newcomes*に描かれるロンドン社会は、亡命者にとって寛容で快適な場所として描かれている。⁷ そのため、この作品には何人かのドイツ人亡命者が登場するわけであるが、中でも Mr. Friedrich Kuhnは、Praverも指摘するとおり、Sir Brian Newcome家の「非常に有能な使用人」(super-efficient servant) (Praver 367)であり、その家の子供たちの世話にも大きく貢献している。Mr. Kuhnの個人事情は作品内において詳細には語られないものの、彼が最初に登場するBrightonのエピソードでは、彼の重要な人物像を僅かに知ることができる。

Sir Brian Newcomeとその妻Lady Annの間には、女主人公Ethelを含む5人の子供(Barnes, Alfred, Egbert, Alice)がいた。このLady Annはまだ幼年の息子Alfredの体調が思わしくないため子供たちを連れてBrightonへと向かうことになる。ここで、この一行に付添ったMr. KuhnはBrightonに到着すると、早速、皆のためにこの保養地での下宿屋を探し始める。有能な彼は、一行の意にかなうようなこざっぱりとした下宿屋をすぐに見つけだし、体調不良であったAlfredを、設えられた二階の部屋へと運び込む。この際、彼の様子は次のように描かれている。“ The little invalid wrapped in his shawl is brought up-stairs by the affectionate Mr. Kuhn, who carries him as gently as if he had been bred all his life to nurse babies. ” (emphasis added; 1:87) この部分からはMr. Kuhnの子供の扱い方が非常に手馴れていることが分かる。ここで彼が見せた優しい子供の抱き方は、後にこの宿の使用人たちや子供好きの女将 Miss Honeymanからも好意的に評価され、彼は周囲の者たちから尊敬を得ることとなる。

Mr. Kuhnの有能さは後の場面においても随所に見受けられるが、彼の特徴がこれほどまでに強調して描かれるエピソードは他にほとんど見当たらない。彼の素性は他の場面においてもずっと曖昧なままであるがゆえに、

読み手にはここで描出される彼の上手な子供の扱い方が強く印象に残るのである。Mr. KuhnはSir Brian Newcome家の者たちがドイツ旅行をする際、今度は現地ガイドとして活躍することになる。

3 . ドイツ旅行

Sir Brain Newcomeの異母兄Thomas Newcome大佐には、画家を志望するCliveという息子がいた。主人公となるこのCliveは、絵の修行を兼ねて友人であるJohn Jamesとヨーロッパ大陸を旅行していた。ドイツのBonnにやって来た際、彼らが出くわしたのは、Mr. Kuhnに引率されてやって来ていた叔母のLady Annとその子供たち、そして女性家庭教師のMiss Quigleyらの一行であった。この時の様子はCliveが語り手のArthur Pendennisに宛てた手紙の中で述べられている。“ Next follows a letter from Bonn.... ‘And whom should I find here,’ says Mr. Clive, ‘but Aunt Ann, Ethel, Miss Quigley, and the little ones, the whole detachment under the command of Kuhn?....’ ” (1:252) 引用中、「Mr. Kuhnの指揮下にある一分遣隊」(the whole detachment under the command of Kuhn)というCliveの表現は、彼らが出くわした際、一行が緩やかな丘を下る時の疲労を防ぐため、現地人であるMr. Kuhnの案内で口バに乗って下山してきた様子を軍隊の騎馬隊になぞらえて表現したものである。そのため、ここでのMr. Kuhnは権力をもった分遣隊の隊長としてではなく、一行を導く案内役として描かれている。またこの表現は、Lady Annらの一行が、本隊に当たるその家の主Sir Brian Newcomeから遠く離れてBonnに来ていたことも暗示していよう。というのも、Lady AnnらがBonnを旅行中、主のSir Brianはフランス南東部のAixにいたからである。

だが、いわゆるこの「分遣隊」にいないのは、なにも主のSir Brianだけではない。奇妙なことに、この旅行者一団の中には、強い支配力を持って他の者を抑圧したり、メンバーの誰かを嫌っていたりする人物（例えば、Ethelの兄であるSir Brian家の長男Barnes Newcomeや彼女の祖母であるLady Kew）が一人もいないのである。長男であるBarnesは、後に父親Sir Brianが亡くなるとすぐに父親の跡を継ぐのであるが、ここからは彼が潜在的に一家の主になり代われる存在であることが分かり、Lady Kewに至っては、

Ethelの縁談をまとめる母親の役割を、彼女の実の母親 (Lady Ann)以上に務めていた。また、このBarnesとLady Kewは二人とも従兄弟であるCliveを嫌っていた。特にLady Kewは、Cliveが画家という安定した多額の収入を見込めない職業を志し、それでいて従兄妹のEthelに好意を寄せていることを知ると、可能な限りこの二人を近づけないように注意を払っていたのである。このような事情から、Bonnで偶然Lady Annらの一行に出くわしたCliveが、その後Badenまでの道程に大喜びで随行することになると、その様子は次のように語られる。

Now that the old Countess[Lady Kew], and perhaps Barnes, were away, the barrier between Clive and this family seemed to be withdrawn. The young folks who loved him were free to see him as often as he would come. They were going to Baden.... Clive was glad enough to go to with cousins and travel in the orbit of such a lovely girl as Ethel Newcome. (1:254)

Lady Annらの乗る馬車とCliveの馬車は並走してBadenへと向かうが、彼らの交流や言動を厳しく取り締まる人物がないこの旅行では、子供たちは自由に好きな馬車へと乗り移れる。続く引用は、このようなBadenまでの旅がCliveやEthelを含む子供たちにとっていかに楽しいものであるかを如実に描き出している。

The journey is all sunshine and pleasure and novelty.... To hear Clive sing as the lad would whilst they[Ethel, Alfred, Egbert and Alice] were seated at their work, or driving along on this happy journey, through fair landscapes in the sunshine, gave J.J.[John James] the keenest pleasure: his wit was a little slow, but he would laugh with his eyes at Clive's sallies, or ponder over them and explode with laughter presently, giving a new source of amusement to these merry travelers, and little Alfred would laugh at J.J.'s laughing.... (1:255-6)

小説中、子供たちがこれほど陽気で愉快でいる描写は他にあまり見られない。Lady KewやBarnesのような旅行の興を醒ます人物がおらず、気の合

う仲間たちだけでいる喜びは、旅の楽しさと相俟ってよりいっそうはじける笑顔を生み出している。また、Bonnの場面からの類推により、Mr. Kuhnがここでも案内役を務めていることは想像に難くない。子供たちの自然な笑いは、愛情深く子供の扱いが上手い彼にあたたく見守られているのであろう。これらを考慮すると、このドイツ旅行者一団の輪の中では、子供たちの自発性が少しも阻害されておらず、CliveやEthelを含む幼い登場人物たちは、案内役を兼ねて彼らを導くMr. Kuhnのまわりで生き活きと楽しく過ごしていると考えられるのである。

ドイツ旅行で過ごしたこの楽しい時間は、後にCliveとEthelにとって、とても貴重な体験であったことが分かる。なぜなら、この二人が後の場面において「幸福」(happy)であると描写されるのは、紆余曲折を経て彼らが最終的に「最も心地よく共に生活を始める」(living most comfortably together) (2:366)まで決して見受けられないからである。Ethelは、ある手紙の中でこのドイツ旅行での日々を次のように振り返っている。“ I remember in old days when we were travelling on the Rhine in the happiest days of my whole life. ” (emphasis added; 2:269) このドイツ旅行のエピソードが*The Newcomes*において決して断片的で考慮に値しない箇所ではないことは、これ以降に見られるCliveとEthelの経緯を辿ることによりさらに明らかとなる。

4 . ドイツ旅行の教訓性

ドイツ旅行で出来上がった子供たちの輪が陽気で幸福であったのは、彼らの自発性が阻害されていなかったことに因るのが大きかった。この要因は、その後、CliveとEthelを含む登場人物たちが、それぞれ結婚相手を選択し、幸福な生活を送れるか否かを左右する核心的な要素へと発展することになる。

まずEthelの場合を見てみよう。Ethelの縁談に実の母親より世話を焼いていた祖母Lady Kewは、彼女に数名の花婿候補を薦めた後、最終的に金持ちの貴族Lord Farintoshとの婚約をとりつける。そして、EthelはこのLord Farintoshを愛していないにもかかわらず、しぶしぶ婚約に同意してしまう

のである。この時、彼女はこの婚約への同意を中産階級家庭で暮らす娘としての「義務」(duty)と表現している。“He[Clive] knows that I[Ethel] have done *my duty*; and why I have acted as I have done.” (2:146)

一方、Cliveも自分が望むような結婚には至らなかった。彼の父 Thomas Newcome大佐は最初、息子には内緒で勝手に彼とEthelとの婚約をすすめようとする。しかし、この縁談はEthelの兄Barnesの裏切り行為によって阻止されてしまい、Newcome大佐は自分の画策した縁談が失敗に終わったことを悔しがる。そして、この悔しさが次の縁談をまとめようとする大きな推進力となり、大佐は息子の意向を顧みないまま知人の娘である Rose Mackenzie嬢とCliveを強引に結婚させるのである。そのため、CliveにとってRoseとの結婚生活は、父親のあらゆる援助によって恵まれてはいるものの幸福ではなかった。

...though with every outward appliance of happiness Clive was not happy. What young man on earth could look for more — A sweet young wife, a handsome home of which the only encumbrance was an old father, who would give his last drop of blood in his son's behalf. (2:235)

これらEthelの婚約とCliveの結婚からは、それぞれ、背後に縁談をまとめようとする親、あるいはそれと同等の役割を果たす人物の、当事者たちの意向をほとんど考慮しない自己本位の推進力が働いていると分かる。そして、Cliveの結婚生活は、支配力の強い仲人の少々利己的な行為が、それに従って結婚した当人たちを逆に不幸にしていることを物語っている。しかし、同じような状態で結ばれたEthelの婚約は、兄Barnesの家庭崩壊により、一つの転機を迎えることとなる。

Ethelの兄Barnesは、親のすすめでClara Pulleyn嬢と結婚し、二人の子供を扶養する生活を送っていた。一方、彼の妻Claraも、結婚前にJack Belsizeという恋人がいたにもかかわらず、親の指示に従って結局は銀行家で裕福なBarnesとの結婚を受け入れたのである。しかし、二人の結婚生活は、Barnesが妻や子供を虐待していたため、悲惨なものであった。それ故、これに耐えられなくなったClaraは、最終的に元恋人のJackと出奔し、Barnesとの離

婚を決意するのである。このBarnesとClaraの結婚は、先に見たCliveとRoseの結婚と相通ずるものがあり、当事者たちの意向よりも親や仲人の思惑が優先されて決められた結婚が、当人たちには逆に不幸な結末をもたらしてしまう、という事実をより強調して描き出している。

さて、Lord Farintoshとの婚約中、兄夫婦の離婚を目の当たりにしたEthelは、その不名誉な騒動を理由として、自身の婚約も解消する。そしてこの後、彼女は、兄嫁Claraが残していった二人の子供を自らすすんで世話し始める。Ethelのこの婚約解消は、親や仲人の思惑よりも結婚に対する自分の正直な気持ちを重視した結果であると言える。なぜなら、CliveとRoseの結婚生活が不幸であることを聞き知った時、彼女は次のような言葉を口にするからである。

“And yet this marriage[between Clive and Rose] was of my uncle’s[Colonel Newcome’s] making another of the unfortunate marriages in our family! I am glad that I paused in time before the commission of that sin: I strive my best, and to amend my temper, my inexperience, my short-comings, and try to be the mother of my poor brother’s children....” (2:269)

ここでEthelは、親や仲人によって強引にとりまとめられた縁談に、自身の意向を顧みないまま同意して不幸な結婚をすることを「罪」(sin)という強い言葉で表現している。ここには、結婚を考える自分たちの、あるいは当事者たちの自発的な意思や心情は重視すべきなのだという彼女の強い信念が読み取れる。このような確信をもった彼女が、志願して兄の子供たちを世話し、その「母役」(the mother)を務めようとすることは極めて意義深い。以下にその理由を提示しよう。

Ethelの“ the mother ”としての役割は、ClaraとBarnesが離婚する直前に、Claraの友人であるLaura Pendennisが見たと語る夢の内容によってより限定的に示されることになる。Lauraは、ClaraがBarnesから元恋人と逃げ出してしまう直前に、不吉な夢を見たと言ってClara本人にその夢の内容を次のように語る。

‘...and I [Laura] saw you [Clara] wandering about quite lonely and wretched and looking back into the garden where the children were playing. And you asked and implored to see them: and the Keeper at the gate said No, never and then then I thought they passed by you, and they did not know you ’
(emphasis added; 2:183)

このLauraの夢においては、「子供たちの遊ぶ庭」(the garden where the children playing)を管理する“the Keeper”が登場するが、これは、現実の世界で兄弟姉妹の離婚後にその子供たちを世話するEthelの役割を予示していると考えられる。つまり、彼女は兄の子供たちの単なる“the mother”というよりは、その「子供たちの遊ぶ庭」を見守る“the Keeper”に近いということである。これらを踏まえると、縁談においては結婚する当事者たちの自発的な意思や心情が重視されるべきだと考えるようになったEthelが、自ら“the Keeper”となって管理する「子供たちの遊ぶ庭」は、先に見たドイツ旅行の場面において、Mr. Kuhnが案内役を兼ねて見守っていた旅行者の一団の輪に極めて似通っていると言える。なぜなら、ドイツ旅行者一行の輪の中では、子供たちの自発性が阻害されない領域が自然に生まれ、子供たちはとても幸福な時を過ごすことができていたからである。ドイツ旅行で過ごした時間を「人生の中でもっとも幸福な日々」(the happiest days of my whole life)と語ったEthelが自ら管理する「庭」は、その時の重大な教訓が活かされた、子供たちの自発性が尊重される領域のことだと理解できるのである。Ethelが「罪」と表現したような、自身の恋心より親の意向を優先させる結婚をしたClaraが、そのような「庭」にいる自分の子供たちに会わせてもらえないのは当然と言えよう。Claraには、その「庭」の重要な意義が理解できておらず、自分の子供たちを望ましい状態で育て上げる資格がないと考えられるからである。

ではLauraは一体なぜここで「子供たちの遊ぶ庭」を夢見たのであろうか。つまり、Thackerayはなぜここでこのようなメタファーを用いる必要があったのであろうか。本論ではこの解答の可能性を作品刊行当時の英国の歴史的事実に求めてみたい。

5 . 「子供たちの遊ぶ庭」 と Kindergarten

*The Newcomes*が刊行されていた1850年代前半は、英国において幼児教育に関心が高まっていた時期であった。その最大の契機となったのが英国におけるフレーベル主義幼稚園、いわゆる“ Kindergarten ”の流入である。小説刊行当時、英国の労働者階級では、既に、ロバート・オーウェン (Robert Owen)が創始したような子供たちを過酷な労働や劣悪な生活環境から救い出すための「幼児学校」(nursery school)や後の“ infant school ”となる工場託児所などが普及していたが、中産階級の子供たちの教育は、依然としてほとんど家庭教師などに委ねられるままであった。Nanette Whitbreadは、Kindergarten導入以前の英国中産階級における幼児教育の現状を次のように指摘する。“ The social conditions were right but the demand for middle class infant schools went largely unrealized until the kindergarten movement of the 1850s. ” (Whitbread 29-30) しかし、Whitbreadが主張するこのような実情は、フレーベル主義幼稚園の出現により、徐々に大きく改善されることとなる。『教育学辞典』にはフレーベルの功績が次のように紹介されている。

1840年にはすでにドイツで約100, イギリスで400, フランスで330をかぞえたこれらの施設 [工場託児所] とは別に、というよりはむしろこれに教育の新生命をふきこむものとして、フレーベルは、幼時教育独自の重要性と幼児の創造的活動に着眼した、幼児の自発性にもとづく教育の場としての幼稚園を創設したのである。(『教育学辞典』「幼稚園」)

英国初の Kindergarten は、1851年ドイツ人亡命者であるロンゲ夫妻 (Johann and Bertha Ronge)によってロンドンのハムステッド (Hampstead)に開園された。この幼稚園は開園当初、ドイツ移民の子供たちだけを対象としたものであったが、子供たちの自発性を育てるフレーベルの幼児教育思想は徐々に英国の中産階級の人々の関心を捉え始めるようになる。英国において Kindergartenが最初に広く知られるようになったのは、1854年にロンドンで開かれた教育博覧会においてであった。この博覧会においてはフレーベル主義幼稚園の教具が展示されたり、ロンゲ夫妻の幼稚園が一般公開さ

れたりした。田口仁久は、この教育博覧会が英国における Kindergartenの導入に与えた影響を次のように解説する。

かくして、一八五四年の教育博覧会を契機に幼稚園が識者の注目を集めるようになり、早くも同年内に、幼稚園を激賞するミッチェル (M. Mitchell)の次のごとき視学官報告書が現れた。フレーベルの方法は、「知的ではあるが真に子どもにふさわしいものである。それは、子どもを子どもとして扱う。子どもに自分で考えさせる。子どもらしい玩具と方法を用いて、自分の判断で行動し、難解な文章をほんとうに理解し、自分のことばで話し、他人の話にも耳を傾けるように、子どもを教育するのである。」(田口 51)

さらに翌年、*The Newcomes*の刊行が終了した1855年は、Woodham-Smithが次に指摘するとおり、*The Times*や*The Athenæum*などの主要紙が、Kindergartenに関する記事を載せたり、Charles Dickensが*Household Words*にそれを英国に推進する内容の記事“*Infant Gardens*”を書いたりした年でもあった。⁸

Leading newspapers, such as *The Times* and *the Athenæum*, printed articles on the kindergarten; while Charles Dickens, who had met the Baroness[von Marenholtz-Bülow] and visited the Ronge's kindergarten, wrote a very full and informative article for his paper *Household Words*.... (Woodham-Smith 37)

このような作品出版当時に見られる英国幼児教育界の出来事は、*The Newcomes*における「子供たちの遊ぶ庭」というメタファーに極めて意義深い示唆を与えている。また、物語中、ドイツ旅行においてMr. Kuhnが見守っていた子供たちの輪が、後にEthelによってその重要性を理解されて引き継がれる過程は、ロンゲ夫妻によって英国にKindergartenが導入された過程とパラレルな関係にあると捉えられる。Mr. Kuhnが見守っていたドイツ旅行者一行の輪とEthelが“the Keeper”を務める「子供たちの遊ぶ庭」、そしてロンゲ夫妻が英国にもたらしたKindergartenは、子供たちの自発性が阻害

されず、尊重されている点で通底していると言えよう。ではEthelとCliveは最終的にどのような末路を迎えることになるのであろうか。それぞれ二人の意思に注目して結末を考えてみよう。

6 . おわりに

Cliveと妻Roseとの間には一人息子が授かっていたが、Roseは産後の体調が思わしくはなかった。そして、最終的にRoseは病気により、父Newcome大佐は老衰によりそれぞれ亡くなってしまふ。こうなることによってCliveとEthelの二人は、晴れて共に暮らし始める契機を得るわけであるが、これは、二人の自発的な意思が最終的に結実したと解釈できる。*The Newcomes*の物語は、こうして、CliveとEthelの二人がドイツ旅行以来の、あるいはそれ以上の幸福な時を迎えることで、その幕を閉じる。語り手Pendennisは二人の結末について次のような思いを語る。

My belief is then, that Clive and Ethel are living most comfortably together; that she is immensely fond of his little boy; and a great deal happier now than they would have been had they married at first when they took a liking to each other as young people.... (2:366)

CliveとEthelがドイツ旅行の際に感じた幸福よりこうして最後に一緒になった時に感じる幸福の方が大きいのは、自発的意思が軽視されたゆえに陥った不幸を二人がそれまで十分に味わい、最後にそれが尊重されることの大切さを痛感したからであろう。そのような二人が「去り行く fable-land」“ Ethel and Clive fade away into fable-land ” (2:365-7)は、小説刊行当時、英国に普及し始めたKindergartenのように、子供たちの自発性が尊重されるころだと想像される。この想像は物語を締めくくる語り手の言葉を意義深い解釈へと誘うこととなる。*The Newcomes*の最後は次のような言葉で締め括られている。

But have they[Clive and Ethel] any children? I for my part should like her best

without, and entirely devoted to little Tommy[Clive's son]. But for you, dear friend, it is as you like. You may settle your fable-land in your own fashion. Any thing you like happens in fable-land. (emphasis added; 2:366)

語り手は最後にCliveとEthelの行く末を読者に想像させている。OEDによれば、“fable”とは第一に「作り事の物語」(fictitious narrative)を意味するため、“fable-land”とはまず「虚構の物語の世界」と解釈できよう。語り手はこの意に合うかのように様々な解釈や想像の許容を認めている。しかし、*The Newcomes*の読者は冒頭において何らかの教訓(moral)を含んだ寓話を読む子供たちに例えられてもいた。ならば“fable-land”の“fable”には、「有用な教訓を伝えるために工夫された話」というOEDの第二定義をも読み込む必要がある。これまで検討してきた物語の教訓を、この定義とともに考察するならば、“fable-land”とは、「子供の自発性を大切にせよ」という教訓が暗黙のうちに具現化され、活かされた領域と理解できるのである。作品冒頭で子供に例えられた読者が、最後に“fable-land”での各種各様の想像を許されるのは、物語後の世界が、それまでの話に描出された教訓と深く密接に関わっているからだと推断できる。このような“fable-land”の解釈は、物語中に見たMr. Kuhn率いるドイツ旅行者一行の輪をすぐに想起させる。EthelやCliveを含む子供の登場人物たちが、楽しくはしゃいで幸福な一時を過ごした仲間の輪は、教訓それ自体を具現化させていると同時に、物語全体に重要なテーマを提示しているからである。

作品中に描かれたドイツ旅行者一行の輪と作品最後で繰り返される“fable-land”という言葉、そして、作品刊行当時ロング夫妻が英国に普及させつつあったKindergartenには、こうして意義深い通底性を読み取ることができる。*The Newcomes*においてThackerayが“fable-land”を創造したことは、文学界におけるKindergartenの導入であったとも言えよう。*The Newcomes*は真に子供の幸福を願う親に貴重な教訓を描き出した教育の寓話として読めるのである。

英国の中産階級社会を見つめるThackerayの皮肉な目はよく知られているが、彼の著名な伝記作者であるGordon Rayは、1950年に発表した論文“*Vanity Fair: One Version of The Novelist's Responsibility*”において、

Thackerayが代表作*Vanity Fair*を執筆する直前に、作品に道徳的示唆を与える小説家観をもちえていたことを明らかにした。この主張を念頭に置かならば、*The Newcomes*に見られる教訓性は、皮肉屋だけではないThackerayをより深く理解するための新たな手がかりとなるであろう。

註

本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第4回大会（2004年11月20日、於甲南大学）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

- 1 引用はShillingsburg編集のテキストから行い、以降では巻数とページ数のみを記す。
- 2 *The Newcomes*に関する先行研究は大別すると、Canham, Olmsted, Winner, 鈴木らによる作品の挿絵や挿絵を担当したRichard DoyleとThackerayの関係についての考察、Harden, Friswellらによる出版事情に関する問題を扱ったもの、またDodds, Rayらによる伝記的事実に基づいたコメントやFraser, Loofbourowらによる文体や語り口についての議論があるが、いずれも物語の教訓性については言及していない。
- 3 Juliet McMasterは*The Major Novels*で次のように述べており、鈴木幸子もこの解釈を支持している。“The ‘Overture’ and the epilogue of jumbled but significant beast fables, which are also illustrated the cover design, set the whole novel in an ironic framework. Certain of the animals in the fables have recognizable traits of characters in the novel - the owl talks like Mrs Hobson Newcome, the donkey in the lion’s skin would be Farintosh, the lamb that beds with the wolf is Lady Clara Pulleyn, the wolf in sheep’s clothing of course would be Barnes himself.”(169-170)
- 4 Thackerayは1853年7月6日から8月30日まで二人の娘と共にドイツとスイスを旅行している。彼が*The Newcomes*を書き始めたのは同年の7月9日、つまりこの旅行初日より3日後のことである。
- 5 イタリア旅行は1853年11月27日から翌1854年3月29日まで続けられた。Thackerayは*The Rose and the Ring*を1854年1月に書き始め、同年の11月1日に書き終えている。この作品のもつ教訓性については、出版直後から *Leader*誌、*Spectator*誌、*Examiner*誌などに掲載された書評において指摘され、賞賛されている。Ray, *Age of Wisdom* 229-33参照。
- 6 Thackerayが友人の妻Lucy Baxterに宛てた1854年5月18日付けの手紙。
- 7 ロンドンにおけるドイツ移民の問題に関してはAshtonの著書を参照。
- 8 Dickensが英国へのKindergarten導入に向けて熱心に活動していたことはHughesの著書に詳述されている。
- 9 論文冒頭に引用した第1巻5ページからの文章のこと。

参考文献

- Ashton, Rosemary. *Little Germany: German Refugees in Victorian Britain*. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Canham, Stephen. "Art and the Illustrations of *Vanity Fair* and *The Newcomes*." *Modern Language Quarterly* 43 (1982): 43-66.
- Dodds, John W. *Thackeray: A Critical Portrait*. New York: Russell & Russell, 1963.
- Fraser, Russell A. "Sentimentality in Thackeray's *The Newcomes*." *Nineteenth-Century Fiction* 4(1949): 187-196.
- Friswell, Hain. "A Missing Chapter from *The Newcomes*." *Sharpe's London Magazine* 17 (1855): 167-170.
- Harden, Edgar F. "The Artistry of a Serial Novelist: Parts 10, 14, and 15 of *The Newcomes*." *Studies in English Literature* 16 (1976): 613-630.
- . "The Growth of a Serial Novel: Five Installments of *The Newcomes*." *Huntington Library Quarterly* 39 (1976): 203-218.
- Hughes, James L. *Dickens as an Educator*. New York: D. Appleton, 1901.
- Loofbourow, John. *Thackeray and the Form of Fiction*. Princeton: Princeton University Press, 1964.
- McMaster, Juliet. *Thackeray: The Major Novels*. Toronto: University of Toronto Press, 1971.
- . "Theme and Form in *The Newcomes*." *Nineteenth-Century Fiction* 23 (1968): 177-188.
- McMaster, R.D. *Thackeray's Cultural Frame of Reference: Allusion in The Newcomes*. Basingstoke: Macmillan Academic and Professional, 1991.
- . "An Honorable Emulation of the Author of *The Newcomes*: James and Thackeray." *Nineteenth-Century Fiction* 32 (1978): 399-419.
- Olmsted, John C. "Richard Doyle's Illustrations to *The Newcomes*." *Studies in the Novel* 13 (1981): 93-108.
- Prawer, Siegbert S. *Breaches and Metaphysics: Thackeray's German Discourse*. Oxford: European Humanities Research Centre, 1997.
- Ray, Gordon, N. *Thackeray: The Uses of Adversity, 1811-1846*. Oxford: Oxford UP, 1955.
- . *Thackeray: The Age of Wisdom, 1847-1863*. Oxford: Oxford UP, 1958.
- . "Vanity Fair: One Version of The Novelist's Responsibility." *Essays by Divers Hands: Being Transactions of the Royal Society of Literature in the United Kingdom* 25 (1950): 342-56.
- Thackeray, William Makepeace. *The Newcomes: Memoirs of a Most Respectable Family*. 1853-5. Ed. Peter L. Shillingsburg. 2 vols. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1996.
- . *The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray*. Ed. Gordon Ray. 4 vols. London: Oxford UP, 1945-6. Cited as 'LPP.'
- Whitbread, Nanette. *The Evolution of the Nursery-Infant School: A History of Infant and Nursery Education in Britain, 1800-1970*. London: Routledge and Kegan Paul, 1972.
- Winner, Viola Hopkins. "Thackeray and Richard Doyle, The 'Wayward Artist' of *The*

- Newcomes.” Harvard Library Bulletin 26 (1978): 193-211.*
- Woodham-Smith, P. et al. *Friedrich Froebel and English Education*. Ed. Evelyn Lawrence. London: Routledge & Kegan Paul, 1969.
- 鈴木幸子 『サッカーを読む』 篠崎書林、1996。
- 田口仁久 『イギリス幼児教育史』 明治図書出版、1976。
- 津守真, 久保いと, 本田和子 『幼稚園の歴史』 恒星社厚生閣、1959。
- 「幼稚園」『教育学事典』 第五巻 平凡社、1956。

(大阪大学大学院博士課程)

The Influence of Britain on the Establishment of the Public Health in 19th-Century Japan

Koji OZAKI

This is the comparative study of the Japanese and the British public health system in the 19th century. In this article, I will particularly explore the establishment of the public health administration in the modern history.

As an example, I would like to take up the idea of Shinpei Goto. Goto is now known as the statesman who formed the plan of the recovery of the earthquake-stricken district in 1923. But he started his career as a doctor, and as an officer at the medical department of the Home Office.

After reading his writings, I came to the conclusion that Goto had directed his attention to the Local Government Board, and that he had especially accepted the idea of John Simon who had insisted on the importance of the profession both at the LGB and at the district.

“Fable-land” Reconsidered: A Fable about Infant Education in *The Newcomes*

Takamichi ICHIHASHI

In the final chapter of *The Newcomes*, the word “fable-land” appears frequently. This word has been regarded as ironical because the portrait of British society as described in the novel seems not to give any moral lesson at all. To consider the word’s meaning, however, the scenes set in other countries on the Continent have not been taken into account. Among them, the German scenes, which have received little attention, need to be examined because of the fact that Thackeray became interested in German education while writing the novel. In this paper I will reconsider what the word “fable-land” means by inspecting the German scenes closely and referring to infant education.

When the Newcome children, including the two main characters, Clive and Ethel, travel on the Rhine, they are guided by Mr. Kuhn, an efficient German family servant. They enjoy very pleasant journey in Mr. Kuhn's care. From this episode we learn that allowing children's spontaneity leads to their happiness. This is the exact antithesis of the unhappy marriages between Clive and Rose, and Barnes and Clara, which their parents arranged, regardless of their wishes.

In the early 1850s when the novel was being published in installments, German refugees, Mr. and Mrs. Ronge, introduced the concept of the Kindergarten, which promotes the valuing and cultivating of the spontaneity of children, to a receptive middle class in Britain. This is also important to our understanding of the German scene above.

The story ends with the narrator's "[y]ou may settle your fable-land in your own fashion. Any thing you like happens in fable-land." It is inferred from these words that "fable-land" suggests the condition of the tour party in the German scene where children are permitted to behave as they like, which offers an invaluable lesson which corresponds with the principle of Kindergarten in allowing children's spontaneity.

Urging the Military Bands Reformation and the Brass Band Movement

Maki UEMIYA

The brass band movement became a striking phenomenon in Victorian Britain accompanied with the expansion of contests, originated and promoted with the first Belle Vue Contest, Manchester, in 1853. It is, therefore, naturally considered that the adjudicators (military bandmasters) had been one of the crucial factors for the historical analysis of the movement, despite the fact that the proceeding studies on the brass band movement had completely failed to contemplate them. For understanding the significance of the movement, more attention must be paid to